

追 悼

前理事長本城秀次氏の突然の死を悼む

理事長 小林 隆 児

ほんの数日前の4月末に学会事務局長野邑健二氏からの突然のメールで、本学会前理事長本城秀次先生が4月27日に大動脈解離のためご逝去されたことを私は知りました。あまりにも突然の訃報でした。享年68歳。まだまだ人生はこれからとも言われる年齢でした。

ただ、この数年ずっと氏は大病と闘っておられました。でもつい最近、今年1月、東京品川で開催された精神保健指定医講習会の帰路で、私は偶然氏にお会いしていました。5年に一度の精神保健指定医更新のための講習会に出席されていたのです。その時、氏とは二言三言、言葉を交わしただけでのお別れでした。氏は学会に顔を出せず申し訳ないと述べておられ、学会のことを常に気にされているのが伝わってきました。かなり無理をされて講習会に参加されたと思うのですが、これからも精神科医として臨床を続けていくお気持ちがあつてのことでしょう

から、それを思うと、氏にとってもあまりに突然の死の訪れであつたのではないのでしょうか。さぞ無念な思いであつたと想像されるのです。万感胸に迫るものがあります。

ここでは現理事長の役目として、前理事長本城氏のこれまでのご功績を紹介するとともに、氏との交流を交え、思い出すまま述べることで、追悼の意を表したいと思います。なお、氏と私は医学部卒業年度が同じ同期の桜ですので、以下、本城さんと呼ばせていただくことをお許しください。

*

私の記憶では、本学会を創ろうとの発案は、初代理事長栗田廣氏（当時東京大学）と本城さん、そして私の3人が1990年7月に京都で開催された国際児童青年精神医学会での懇親会の場での立ち話から生まれたように思います。この写真はその時に撮影されたものです。



右から本城秀次氏、筆者、若林慎一郎氏
(1990年7月、京都で開催された国際児童青年精神医学会会場にて)

早速その翌年、1991年に本学会が設立され、最初の学術総会が同年10月27日に名古屋大学の鶴友会館で開催されました。その時の大会会長が名古屋大学教育学部にいた本城さんでした。

当時、本城さんは乳幼児を対象とする研究にさほど積極的に取り組んでおられたわけではなかったと思うのですが、栗田氏が本城さんにぜひ一緒にやろうと誘われたのがきっかけだったのではと想像します。その後の準備は本城さんが中心になってなされ、翌年には学会が設立されたわけですから、本城さんには乳幼児に対する思いは強いものがあったのでしょうか。

本城さんはその前年に名古屋大学教育学部助教授に就任されていたので、当時から大学院生の教育をどうしようかと真剣に考えておられたのでしょうか。自分の研究のためというよりも教え子（特に女性が多かったせいもあったからでしょうか）の研究の場として、乳幼児は将来性のある領域ではないかとの思いがあったのではないのでしょうか。当時から同僚や永田雅子氏（本学会現編集委員長）らがNICUで着実に臨床研究を蓄積されていたことから、大学院生の研究の発展を乳幼児の領域に期待されていたのでしょうか。

本城さんの甲斐があつてのことでしょう。本学会は教え子たちにとって研究成果を発表する格好の場となり、毎年教え子たちは口頭発表を行うということが恒例となっていました。その中からかなりの数の論文が本学会誌に投稿され、受理され、掲載されています。このように本城さんは弟子を熱心に指導され、それが本学会の発展にも繋がっていったことを考えると、本城さんの本学会での功績はとても大きなものがあります。

本城さんは、のちに2005（平成17）年4月、本学会の理事長を初代栗田廣氏から引き継がれました。2回再任されるなど、理事からの信任が厚かったのですが、残念なことにご病気のためもあってか、志半ばでご自分から退任を申し出られ、2014年度から私が引き継ぐことになり、

現在に至っています。在任期間は9年になります。まだまだやりたいことがあったのではと想像しております。おそらく無念だったろうと思います。

本城理事長時代はしばらくの間私が編集委員長を引き受け、二人三脚で学会運営をしておりましたので、本城さんとの繋がりは他の仲間にはないほど深いものでした。本城さんは苦言を呈することはなく、私はのびのびと職責を全うすることができたことに、今更ながら感謝の気持ちで一杯です。

*

本城さんと私との最初の出会いはいつだったのか、記憶は定かではないのですが、おそらくある年の児童青年精神医学会ではなかったかと想像します。当時名古屋大学には私とほぼ同期の世代に本城さんと杉山登志郎氏がおられ、よく一緒に議論したものです。

誰でもそうでしょうが、同世代の仲間の仕事は特に気にかけて目にしていたものです。本城さんの臨床研究の基本的姿勢は一言で言えば「現象記述的精神病理学」であったと私は理解しています。おそらくそのモデルとなっていたのは写真と一緒に写っている若林慎一郎氏（当時名古屋大学精神科、のちに岐阜大学医学部教授）だったのではないかと想像しています。お二人の研究姿勢に共通したものを私はいつも感じ取っていたからです。日頃からこつこつと丁寧に臨床に従事され、そこで自ら直接掴んだ臨床的知見を、丁寧な文章で論文文化されていました。けっして奇をてらうようなところはなく、その文章にはいつも本城さんらしい誠実さが表現されていました。

本城さん自身も述べておられるように（本城、2014）、ある一つのテーマで研究に邁進するというよりも、病院で出会った患者さん誰に対しても丁寧に臨床に取り組み、そのなかで掴んだものをその都度、論文文化し、国内誌はもちろんですが、海外の権威ある専門誌にもよく投稿し、掲載されているのを私は幾度となく拝見しなが

ら、良い意味での刺激を受けていました。

そのなかでも本城さんにとっての自信作は、以下の論文ではなかったかと思います。この二つの論文のスタイルをみると、本城さんの研究姿勢がとてもよく表れています。

「家庭内暴力を伴う登校拒否児の臨床精神病理学的研究」(小児の精神と神経, 1987) (学位論文)

“Obsessive-compulsive symptoms in childhood and adolescence” (Acta Psychiatrica Scandinavica, 1989)

さらに本学会に深く関係する乳幼児関連のお仕事としては以下の2冊を忘れるわけにはいきません。

『精神保健と発達障害の診断基準—0歳から3歳まで (奥野光との共訳)』(ミネルヴァ書房, 2000)

『乳幼児精神医学入門』(みすず書房, 2011)

*

以上、思いつくまま在りし日の本城さんについて述べてきましたが、今私の心に、本城さんからいつもの優しい言葉で「ごころうさん、ありがとう」との声が届いたように感じました。

長い間の闘病生活、さぞ大変だったかと想像します。やっとそれから解放されたことでしょうか。本当に長い間お疲れ様でした。安らかにお眠りください。本学会でのご功績に本学会全会員を代表して改めて心よりお礼申し上げます。

合掌

2018年5月4日

引用文献

本城秀次 (2014). 退職にあたって. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 61, 1-11.



本城秀次先生御略歴

〈学歴・職歴〉 昭和50年3月 名古屋大学医学部卒業
昭和60年8月 名古屋大学医学部助手 (精神医学講座)
昭和63年11月 医学博士 (名古屋大学)
平成元年3月 名古屋大学医学部講師 (精神医学講座)
平成2年4月 名古屋大学教育学部助教授
平成9年4月 名古屋大学教育学部教授
平成13年4月～平成26年3月
名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター教授
同 附属病院児童精神科 (平成14年4月～親と子どもの診療部) 教授併任
平成26年4月 総合心療センターひなが ささがわ通り
心・身クリニック院長

〈当学会との関わり〉 平成3年当会設置時～平成16年 事務局長

平成16年～平成26年3月まで 理事長

〈主な業績〉 本城秀次監修 子どもの発達と情緒の障害 岩崎学術出版 2009
本城秀次 乳幼児精神医学入門 みすず書房 2011
本城秀次・野邑健二・岡田俊編 臨床児童青年精神医学ハンドブック
西村書店 2016
他多数